

7
部落問題文芸・作品選集

部落問題文芸作品選集

第7卷

融和促進戲曲集

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第七卷

昭和四十八年十月十六日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二丁目二一五
電話(〇三) 七二六 六一五一(代表)
(七二三) 九二四四(夜間)
振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

融和促進戲曲集

例言

本輯は昭和五年本協會に於て懸賞募集に係る融和促進戲曲中より當選の五篇を二等（二篇）三等（三篇）の順に配列印刷に附したるものなり。

目次

一、暗闇を走る女……………	一
一、搖籃の歌……………	九
一、飛躍……………	三〇
一、月下の誓ひ……………	七五
一、差別の運命……………	三八



闇^や暗^かを走^{はし}る女^{おんな}

第一幕

時	所	人
室町時代の末期	石山寺、観音堂前	京の前
		敦如の母
		廿歳前後
		姑母
		敦如の祖母
		六十歳前後
		春日丸
		敦如の幼名
		六歳
		猿舞の三吉
		流浪者の少年
		十一歳
		三吉の母
		流浪者の母
		五十歳前後
		權太
		無頼漢
		其の他流浪者の群
		村人

櫻や杉の古木茂つてゐる。

上手にかけて小さな観音堂。

（京の前。忍びやかに下手より登場。堂の前にて少時思ひ入れ）

京の前 『人もゆるし吾もゆるす演名貞純の一人娘の妾が、拾ひ兒であつたとは……。父上様のあの、臨終の言葉なれば……。やつぱり……。妾は此の堂の前に捨てられてゐたのだ。子寶を祈つて居られた父上様に、佛の與へとして育てられて今日の妾となつたのだ。だが、生みの親は何處にあられるやら……。逢はれるものなら逢はして下されませ』（懐しさうに堂の前で合掌）

春日丸及び姑御前下手より登場。

春日丸 『お母様！』（走りよつてとりつく。）

京の前 『濟みませなんだねエ』（抱くやうにして）『妾一寸お先きにお詣りしてゐたの』
姑御 『觀月堂の方へ参りませう』（先にたつ、母子は後より従つて上手へ消へる）

流浪の人の一隊登場花道より。

(國より國へ、日本國中流れ巡る男女十七八人。所帶道具の鍋釜類から、商賣道具の籠や鋸鎌類や、住ひの天幕類まで各々分擔して背負つてゐる。黙々として、うつむきのまゝ、いづれも汚れたりで跳。最後に三吉と其の母登場)

三吉の母 (肩あてした破れた着物。跳。女としては大形の背丈。生活に疲れたる姿。悩もてる者の面持

ち。)

『てめえたちや、河原へついて、天幕の用意をしとけよ。』

(流浪の人々。無言にて、うなづき。其のまゝ上手へ消える。)

三吉 (水色の頭巾。紫の袖無し。赤い股引袴。汚れた風呂敷包を背負て、其の上に猿が乗つてゐる。)

『おツ母あ、此のあたりが、よからふ。』

(猿を下ろして、猿舞の用意にかゝる。)

村人数人に續いて、京の前座上手より登場。

猿舞を面白そうに、立つたり、踊んだりして村人と共に見物してゐる。

左手に太鼓。右手に鞭。調子をととりつゝ三吉は唱ふ。猿は舞ふ。

「いやましの、山を越え來て……トン、トン。いやさかにトントン。里にはさかる夏草の、トン。思ひしなへて、偲ぶらん……トントン。妹ぞ戀しや、戀しや里の妹が門見ん。トンなあびけ此の山。……」

村人甲『よく舞ふた。』

村人乙『ウン、歌がうまい。』

村人丙『錢やろ、錢やろ。』

三吉『有難う御座います。有難う御座います。』

（金を貰つて廻る）

京の前（帶の間より、紙入れを取り出し鍔を渡さうとする際、猿が食物とでも思つたか飛び下がる。）

『これッ。』紙入れを持つ左の手を高くさし上げた。其の一時京の前の左の二の腕にある、ほぐろが奇異に見える。）

三吉の母『あッ』（箱に腰を下ろしてゐたが突つ立つて、京の前の姿に見入る。）

村人甲『あつちい行かふ。』

村人丙『觀月堂へ行かふ。』

姑御『膺を連れて、本堂の前で、休すむほどに、駕籠の用意を云ひつけといてはどう？』

京の前『はい。そういたしませう。用意さして、迎えにまいることに致しませう。』

春日丸は姑御と嬉れしさうに、はしやぎ乍ら下手へ入る。

三吉は猿を連れて上手へは入る、

三吉の母『もうし。御女房様！』（呼びとめて近よる。）

京の前『妾に？』（花道のきわで、不しんに振り返へる。）

三吉の母『はい。ちよつとお尋ね申し上げます。御女房様、あなたは何處のお方で御座いませうか』

京の前『妾は、東山の報恩寺の裏方、今日は忍びで遊山に來た。』

三吉の母『左様で御座いまするか。實は、わ、わたしは、子供を捜してゐます。此の觀音様の前

に、捨て娘を、捜がしてゐます。もう今年は二十四になるはずです』

京の前『え、え、捨て娘を？』（引きつけられるやうに近よる。）

三吉の母『はい。はいッ。若しやあなたの左の二の腕の、ほぐろは蓮の花では、ありませんかい

十六枚の花瓣の、蓮子の花ではありませんまいか？ お女房様』

（見上げた眼は涙で光つてゐる）

京の前 『ええッ!! そんなら？ お前は!』

三吉の母 『オホッ! やつぱり、そうで御座いましたか』

『嬉しや。嬉しや! よう出世して呉りやつたなあ! そなたの親は、住むに家なく、耕すに田地もなく、國の戸帳にも、のけ者にされた哀れなやつ。國から國へ流れて巡る漂泊ひもの、子供の出世を希ひつゝ、廿四年前の春の夜に、襦衣のまゝに、捨て兒したのは此の妾』

京の前 『おほ! そんならお母様? お母様?』

三吉の母 『吾が兒か!! 嬉しや、よう出世して呉れた。其のほゞろは、親子の縁の愛着から、鍋煤を針で畫いた文身!!』

（すり寄つて縦膝のまゝ、京の前の手にすがる）

京の前 『そんなら、そ、そなたが、妾の親様かい。そなたが私の?』

『父上様の臨終の言葉に、はじめて知つた身の宿命、一年このかた、産みの親御は何處やら

求めて居りました。心で搜して居りましたが』

(母親と云ふ女の肩に手をかけて、泣く)

(森の中よりふくろうの聲)

三吉の母『兒を捨てる親の苦しみ、心を鬼に、捨てるも吾が子の出世の爲め、よう出世して給もつた。親の念力がとゞいたのだ。一族のものゝ出世の手懸りぢや。

『もう、これが一生のいとまごひ。親は死んだと思つて給も。親は無い子と思つて給も。(泣く……)』

『之が一生の生き別れ(泣く……)捨てた子ぢやもの親ぢやもの……』

『どうぞ、其の身を達者に、子供を大切に、出世して給も。今の綺麗な鷹様は、そなたの子かい？ わしの孫かい。オホ……、嬉しや、有難や。』(合掌)

三吉の母『ぢやが、決して、決してそなたの身の上をあかすぢやないぞ。』

『あかすが最後、身の破滅!! これが最後ぢや』

『そなたの親や一族は、おんなじ人であり乍ら、定る家もなく、國から國へ流浪の身の上。』

(泣く……………)

『あかすぢやない、語るぢやない。どうぞ、子供を澤山産んで……是れが別れぢや……』

京の前 『お母様！ あんまりつれない……。』

『あんまりぢや……』(泣く)

姑 御 『京の前や、京の前や』(背景の奥より)

二人はギョツとして離れる。

三吉の母走つて上手へ入る。入れ替りて下手より姑御。春日丸。

姑 御 『駕籠の用意は出来ましたかい。鷹が怠屈して、せいてならぬ故、出て來ました』

京の前 『はい。はい。すぐ御案内致しませう。』

『是れはまあ妾としたことが、鷹を貴女におあづけして、さぞかしお困りで御座いましたろ
鷹や、さ、母あ様にお出で、手をとつてやろ、下には女中も待つて居やう程に』

三人花道より退場。

(観音堂の扉、内より開く。中より一人の無頼漢現る)

無頼漢（三人の後姿を見つめてゐる）

『よい鳥がかゝつた。アハ〜』

（ことありげに下手へ退場）

——ふくらろの聲の内に幕——

第二幕

第一場

所 東山報恩寺書院

人 光 惠 報恩寺第七代の上人 三十歳前後

姑 母 光惠の母 六十歳前後

京の前 光惠の妻 廿歳前後

權 太 無頼漢

「渡雁の聲に幕明く」

（古風な金襴——下り藤の紋——が更けた行燈の火に寂かに光つてゐる。庭に面して經机、光惠上人——白無垢姿——書見中。庭にはほの白う咲いた字の花の生垣、暗に沈んでほのかに母屋の燈が見えてゐる）

（北へ歸へる渡雁の聲、二聲三聲）

權太 （生垣をくぐりて忍び入り、書院の裏手に入る）

（書院の上手より現れ上人の後に立つ）

『ごめんねえ』（牛の様な聲）『ごめんね』

光惠 （寂かに書を閉ぢ、頂きて机上に置き、やたら權太の方に向き直ほらる）（無言にして正面から權太を見られる）

權太 『すまねエが二百兩、出して貰らうか』（ズシリと尻を据える）

『えゝ、報恩寺の上人とやら、此の場で貰らう！』（鎧徹刀を疊に突き立て、眼をむいて覗む）

光惠上人 『金の無心で御座りまするか。』

『御覽の通り、昔に變る報恩寺の拂底、二百兩どころか、十二十の金にも困却致す有様、殘

念乍ら……………」。

『あ。今日、江州より、あがつた金がある、これにてお歸りなさい。』(机の側にあつた紙包の小判二三枚を投げあたへる。)

權太 『馬鹿ッ』(威丈高になる)『これしきの金を無心に、わざわざ夜中、参りやしねエ……』

『報恩寺が潰れるも興るも、此の江州權太様の口一つだ……』

『さあ、此の權太様が「おほそれ乍ら」と、祇園の役所に名乗り出りや、見る／＼うちに、此の報恩寺は丸潰れぢや、安い値段だ。今宵出来ねば、明晩まで……』

光惠上人(無言のまゝ、權太の顔を見て居られる)

權太 『匿くしても現れるが世の習ひだ。報恩寺の裏方「京の前」は、ありやあ、流浪者の娘ぢやと、祇園の役所へ申し出やうか。

『それとも、金で済ますか、さあ。』

光惠上人 『何を申す、浪蕪者めが。』(つめよる)

權太 『畜生!! しらばく^{ばく}れるな。權太様の耳に入つたが最後、たゞでは済ませねエぞ、石山

寺の觀音堂、權太様の忍んでゐるとも知らずして、うぬの奥の「京の前」と猿舞のば婆とが、抱きあつて親子の對面、左の腕の蓮華のほぐろが、親子の證據、さあ之でも頭を振るか、あのほぐろは流浪者とは云へ親子の愛着から、鍋煤を針で入れたる文身ちあと、聞いた上には證據はこつち、花瓣の數も十六枚、さあ、金を出すか。』

光惠上人『何を……。』

權太『行かふか、報恩寺取り潰しの輪旨が出るは、眼前のことだわい。』

『比叡山の、山法師共が柱一本づゝ、引つこぬいてとり潰すも、今日明日のことだ。さあ、安い値段だ。』

光惠上人『報恩寺が潰れやうとも、一文の金も出すことならぬ』

權太『何だつと！』（立ち上りさま切りつける）

光惠（身を脅し取り組む）

——暫時格闘——

光惠『エイッ』（暫時格闘、權太庭へ投げ飛ばされ、逃れる）